



研究の出口戦略

■ 辻井 潤一

産業技術総合研究所人工知能研究センターのセンター長に着任にして、6カ月が経った。その前の4年間は北京のマイクロソフト研究所にいたので、久しぶりの日本である。ただ、その間、何度も日本に帰国していたので違和感はないだろう、と思っていた。ところが、7年間の英国滞在の後に帰国した1995年のときよりも、違和感は大きい。なぜ、だろう？

英国からの移動は、大学から大学の移動であった。これに対して、今回は、米国IT企業から国立の研究所への移動、かつ、激動の中国から安定の日本への移動である。違和感の一因は、この環境の変化にある。ただ、それ以上に、20年前と現在の技術変化の速度に大きな差がある。人工知能の研究が、この4年間に大きく動いた。ビッグデータから機械学習へという以前からの傾向が、イメージや音声の認識での深層学習の成功により拍車がかかった。テキスト処理の分野でも、意味の分散表現の論文が2013年に発表されると、すぐに多くのグループが追従し、分野が大きく変化した。

人の移動もめまぐるしい。巨大IT企業による大学教官の引き抜き、研究者のIT企業間の渡り歩きが日常化している。意味の分散表現は、2012年に東欧の大学で博士号を取得した研究者が2013年に巨大IT企業の所属で発表したもの、さらにその本人は2014年には別の巨大IT企業に移籍している。

帰国後の違和感は、この激動の中で日本が不思議な風の中にあることにある。いや、風は、正確ではない。日本にも、人工知能ブームの喧騒がある。ただ、そのブームはなぜか上滑りで、上滑りの喧騒とそれから隔離された風という分裂がある。この分裂の原因には、さまざまな

■ 辻井 潤一

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 人工知能研究センター 研究センター長

1971年京大修士修了。同大助教授、マンチェスター大学教授、東大教授、マイクロソフト研究所首席研究員などを経て、現職。日本IBM科学賞など、受賞。ACL会長、IAMT会長などを歴任、現在ICCL(国際計算言語学委員会)議長。ACLフェロー、当会フェロー、紫綬褒章。京大工博。



要因が関係し、根が深い。ここでは、最大の要因の1つに、研究の出口の欠如を挙げたい。

米国の西海岸では、情報技術者の不足から人件費の高騰と、人材の激しい流動化が起こっている。北京でも同様に、研究機関、大学、ハイテク企業が集積する中関村で同じ現象がある。優秀な若者が、自己実現を求めて移り歩く。日本でも同様な流動化はあるが、限定的である。

若い研究者が将来の雇用不安から、時限付きのポストを嫌う、また、大学と企業とを峻別し安定の大学へと向かう。この2つの傾向に、帰国当初、強い違和感があった。前の東欧の学生は、博士時代に米国の大学、IT企業でのインターンを経験し、国境を越えて流動している。最近米国で話した若手も、3年時限のポスト後のキャリアについて、有名なIT企業と大学の名前を並列に並べて、迷っていると話した。日本の若手との意識の差は大きい。

6カ月経って、若い研究者の安定志向が彼らのせいだけではないこと、日本の人工知能研究に出口戦略がないことが最大の原因かと気が付いた。ブームの喧騒とそこから隔離された凧という分裂の主因も、研究の出口戦略の欠如にあるようだ。巨大IT企業が少ない日本で、独自の出口戦略をどう構築するか、研究センターに課された最大の課題かなと思っている。

